

信友

信友会事務局

東京都新宿区高田馬場
3丁目45-4
電話 03-5330-1192 (代)

水魚の交わり

会 長 福 井 孝 三



会員の皆様、そして日夜ご活躍の現職の皆様新年明けましておめでとうござい
ます。旧年中、信友会に賜
りましたご支援とご協力に
対し厚く御礼申し上げます。

昨年、民主党政権が誕生しました。今年は、マニフェ
ストで口当たりの良い約束をした政権の実力が試される
年となるでしょう。

政権の交代は、防衛省にとって防衛大綱と次期中期防
計画の策定を目前に控えた重要な時期でした。しかし、
北澤新大臣は着任早々、「インド洋での給油活動は自民
党が言う程世界から評価されていない」「延長と言う選
択肢はありえない」等発言。また、防衛大綱と次期中期
防計画は一年先送りとなり、今年末までに策定されるこ
とになりました。民主党政権であっても国家存立の基本
である国の安全保障政策には、日米関係や周辺諸国情勢
を十分に検討して真剣に取り組んでもらいたいものです。

今年は、通信科部隊の中核である通信団と北部・東北・
西部の各方面通信群が創隊五十周年を迎えることになり
ました。通信団・各方面通信群の五十周年を心からお祝
い申し上げます。

昨年、ご覧になった方も多いと思いますが、三国志の
「赤壁の戦い」を描いた映画「レッドクリフ」が上映さ
れました。第一部は水上の戦い、第二部は陸上の戦いを
描いたのですが、そのスケールの大きさと迫力ある戦
闘シーンの凄さに久しぶり映画の醍醐味を堪能しまし
た。中国の西暦三百年から約百年間の歴史に基づき描か
れた三国志は、我々が日常使っている多くの名言やこ
とわざがあります。例えば「苦肉の策」は赤壁の戦いで
生まれしました。「十人十色」「泣いて馬腹を切る」「水魚
の交わり」なども三国志からきています。

蜀の劉備は三顧の礼をもって軍師諸葛亮(孔明)を迎
えます。劉備は孔明に師礼をとり、寝食を共にし、本格

的に天下取りへの行動を始めます。これに対し、義兄弟
の契りを結んで苦勞を共にしてきた関羽と張飛は面白く
なく、嫉妬から「いったいあの孔明にどれほどの才能があ
るのか、家兄には少し人に惚れこみ過ぎる癖がある」と
非難します。すると劉備は「わしが孔明を得たことは、
魚が水を得たようなものだ」と言います。ここから上司
と部下の親密な関係、お互いに無くてはならない信頼関
係を「水魚の交わり」と言うようになりました。

これに對し中国の戦国時代(紀元前四百年〜二百年)
趙の蔣相如は、強國秦との外交で成果を挙げ大臣級に昇
進します。歴戦の名將廉頗は、「口先だけで昇進した」
と、蔣相如に強い不満を抱きます。ある日、蔣相如は道
で廉頗と出合いそうになり、別の道に避けます。これを
知った家臣達は主人の気弱な態度を追求します。しかし、
蔣相如は「今、廉頗と争うのは秦の思う壺であり、国の
ために廉頗の行動に目をつぶっているのだ」と諭します。

この話を伝え聞いた廉頗は上半身裸になり「これまで
無礼な行為の罰として鞭で叩くように」と蔣相如に謝罪
します。すると、蔣相如は廉頗を許し、服を着させます。
廉頗はこれに感動し、「あなたに頭を刎ねられても悔い
はない」と言い、蔣相如も又「私もあなたに頭を刎ねら
れても悔いはない」と言います。刎頸の交わりと言言言
葉はこうして生まれました。すなわち強い絆で結ばれ、
何があっても後悔しないような関係を言い、友人を刎頸
の友と言います。

この二つのことわざは、組織の発展と目的達成のため
には、上司と部下、先輩と後輩の縦のつながりや同僚・
友人間の横の繋がりに対し、相互の信頼関係がいかに
大切であるかを我々に教えています。信友会は親睦目的
の会ではありますが、いつまでも水魚の交わりと刎頸の
交わりを大切にしたいものです。又、五十周年を迎えら
れた各部隊がそれぞれの長を核として水魚の交わりと
刎頸の交わりを大切にしながら「層充実発展」されんこ
とを祈念致します。

人を育てる

陸幕装備部通信電子課長 田 原 計



信友会会員の皆様には常
日頃から温かいご指導とご
支援を賜り、厚く御礼申し
上げます。

さて、前号記事において、
クラゲから蛍光タンパク質
を発見してノーベル賞を受賞された下村脩氏の「当時の

指導教官から「やれ」と言われたからこの研究を始めた。」
との言葉を紹介させて頂いたところ、自衛隊勤務時代に
同様の経験をされた諸先輩から好評をいただきました。
氏は、後進の育成にも力を入れておられ、インタビュー
に「信条は？」と問われ、「難しいからやらない」とい
う発想が一番嫌い。物事は難しく見えても、できてしま
えば簡単なものだ。と、また「若手研究者に一言！」
には、「やり始めたら諦めず、できるまでやるな。一
度ギブアップすると癖になる。」と答えています。後進
への厳しくも温かな金言であると思います。

さて、昨年、歴代陸幕装備部長会議に参加させていた
だいたところ、私の自衛官人生に大きな影響を与えて下
さった方に、二十数年ぶりにお目にかかることができま
した。それは、私が第6通信大隊において小隊長をして
いた時のN師団長でありました。N師団長は、我々に自學
研鑽の動機を与えることを第一の目的として、AOC入
校一・二年前の幹部を対象に、四半期に一回、「初級幹
部総合検定」なるものを実施されました。検定は、まず
事前に師団長推薦図書が指定され、読後所見を提出、次
いで神町駐屯地に一堂に会し、共通教範に関するペーパー
試験と図上戦術作業、最後に体力検定またはスキー検定
を行って終了となります。四半期に一回、約一週間、使
い勝手の良い初級幹部が部隊を留守にするため、成果の
見えない当初は、隷下部隊長からは不評だったようです。
しかし、試験を受ける我々にとっては、各駐屯地に散在
する同期と酌み交わす絶好の機会でありましたし、何よ
りも、師団長の狙い通り、AOC入校の前に、「野外令」
や「野外幕僚勤務」を開いて机に座る良いクセをつける
ことができました。また、師団長が選りすぐった推薦図
書「八甲田山死の彷徨」「こんな幹部は辞表を書け」「戦
略的思考とは何か」「嵐の中の北歐」等名著を読み、「幹
部とは...、指揮官とは...、国家とは...」を考えさせ
られ、読書の面白さも知ることができました。

会議後の懇親会において、N師団長は「初級幹部は、
部隊で訓練してもベテラン陸曹にはどうしてもかなわな
い。」「何とぞ」と努力すれば解決することだが、易きに
うつなると部隊勤務自体が苦痛になってくる。初級幹部の
うちに訓練の楽しさ、面白さを体得させておかないと不
幸な幹部を作ってしまう恐れもある。故に、初級幹部に
対する教育の大切さを痛感していた。」と当時の思いを
語られました。更に、体力検定は「初級幹部がベテラン
陸曹を使いこなすためには体力が武器、体力があれば気
力も横溢してくるし、体力・気力が充実していれば指揮
を付けておくことは人生の宝となるであろう。」との
思いからなされたことでした。それから二十数年を
経て、N師団長の思いに改めて触れ、後輩に対する深い
愛情に頭が下がりました。当時は、「師団長命令だから

仕方がない。」というのが机に向かった正直な気持ちで
ありましたが、まさに天恵の一事であり、本当に有り難
いことだったと思います。そこに下村氏という偉大な研
究者とN師団長という偉大な指揮官の姿が重なり、どの
世界においても同様に、自らの使命に真摯に立ち向かっ
ておられる人は、同時に「人を育てる熱い思い」を持た
れていることに気がされました。

今、通信科職種は時代の大転換期の真っ只中にありま
す。近く、NCW(ネットワークを中心とする作戦)の
基盤となる基地通信網のIP化が飛躍的に進捗すること
も、新野外通信システムや衛星幹線通信システム、指
揮システムと一体として運用される機能別指揮統制シ
ステムが次々に整備化されて参ります。これに伴い、通信
科職種に期待される役割は、「ネットワーク」のみなら
ず「システム」の領域まで、さらに、陸海空に続く第四
の戦場と言われる「サイバー空間」にまで、益々大きく大
きくなっていくことは必然であります。いま成すべき職
務に全力を尽くすことは勿論重要なことでありますが、
同時に、それぞれの持ち場において、我々の仕事を引き
継ぎ、これを更に発展させることのできる人材を育てる
ことが、通信科職種がその使命を将来にわたって成し遂
げていく為に不可欠であると思っております。

信友会会員の皆様には、引き続き尚一層のご指導とご
支援を賜りますようお願い申し上げますとともに、本会
の益々の御発展と会員皆様の御健勝をお祈り申し上げま
す。

46周年総会・懇親会

- 【お願ひ】
出欠については同封のはがきで御返信下さい。
- 一 日時 平成二十二年二月二十日(土)
十一時三十分より
- 二 場所 第一ホテル東京(前年と同じ)
新橋駅前徒歩二分
電話 〇三・三三〇・一四四一
住所 東京都港区新橋一・二六
- 三 会費 九,〇〇〇円(当日受付にて頂きます)

信友会四十六周年記念の総会及び懇親会を左記
のとおり実施します。奮ってご参加いただきます
ようお願い申し上げます。

懇親会は例により新退官者の歓迎会として
現役と共催で行います。統合係幕僚監部、陸上幕僚
監部、通信団、通信団、補給統制本部、研究本
部、近傍部隊、入校生等多数の現役が参加の予
定です。(例年百五十名以上)

年に一度の懇親会です。是非ともご出席いた
だき、同期・先輩等会員相互はもちろん、若々し
い現役とも懇親の実をあげて頂きます様お願い
致します。

将来の通信電子装備品の 補給整備について

補給統制本部通信電子部長

住谷 正仁



信友会の皆様におかれましては、常日頃からご指導・ご協力戴きまして心から感謝申し上げます。

さて、平成二十年十二月

電子課長の田原一佐から補給統制本部通信電子部長を申し受け、早や一年が経過しました。私なりに問題意識をもって日々の業務を実施しております。特に感じていることは整備についてです。具体的には通信電子の装備品が陸上自衛隊創設当初と現在とはその構成が全くと言っていい程変わってしまったのに、整備の枠組みはほとんど変化していないということです。もちろん整備段階区分の見直しは大々的に実施しましたが、本来もっと変えねばならない部分があるのではないかと考えます。

陸上自衛隊創設当初、通信器材の主体は無線通信と電話でした。載っている信号は音声、モルス信号、テレタイプ、テープ信号等です。それが現在又は将来運用されるシステム装備品と言われるものはどうでしょうか。信号は音声のほかにコンピュータ上のテキスト、画像、動画等が載っています。また、信号そのものもアナログ信号からデジタル化した信号となっています。I/P交換機になると音声信号もコンピュータネットワーク上で送受されるデータと変わらなくなります。

このような状況を踏まえ、これからの通信電子器材の整備の特性について考えて見ます。まず第一に、ハードだけでなくソフトについても考慮しなければなりません。通信網を行き来する信号自体がコンピュータで処理されたデータとなり、更にI/P交換機やソフトウェア無線機が普及すると機器そのものがハードウェアのみならずソフトウェアの不具合も生じる可能性があります。有線整備特技や無線機器整備特技にその能力を付与するの、整備特技自体を本能的に見直すのか、また、外注に頼るのか等について検討が必要とします。

次に、これからの通信電子装備は、各種装備品を接続して運用されるという特性があります。将来の戦い方では、センサーからシユータまで様々なシステムを接続し、一つの大きなシステムとして運用されるようになります。複数のシステム等を接続すると個々のシステムは問題な

いのに接続するとうまく繋がらない、というような不具合も考えられます。トータルとしての不具合の原因究明能力をどのような部隊・隊員が持つべきか。また、今後システムの実用試験等を富士のシステム総合試験棟で各種システムを接続しながら実施するようになりますが、システムの整備においてもそれと同様の整備器材を保有すべきか等について検討する必要があります。

そして三番目に、これからの通信電子装備はいわゆるCOTS製品と言われる市販品が多くなるという特性があります。COTS製品は民間技術の動向で、あつという間に陳腐化し、その寿命は陸自の従来の研究開発してきた装備品に比べると非常に短いものです。COTS部分のみは耐用年数を別に設定して更新するか、レンタル修理と外注による処置が必要とします。更に、官側がすべき交換した方がよいもの等についてや、初めから外注と分

以上三点は挙げましたが、まだまだ考慮すべきことはあると思います。これらのことから陸上自衛隊の通信電子に関する整備業務は大きな変革に迫られていると感じております。今、補給統制本部通信電子部ではこれらを踏まえた検討を始めております。皆様のお知恵をお借りしながらアウトプットを求めていきたいと思ひます。引き続きご指導・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

司法書士試験に合格して 感ずること

星野 毅



七年もの長い浪人生活を経て、昨年ようやく合格することができた。たまたま、合格最高齢の記録を更新したことで読売朝刊の地方版の記事となった。こんなに

遅れたことに自責の念で居たのに面映い。そして今年、この記事を知った海老名駅近くの事務所へ招かれ、見習修行が始まった。ところが、それは束の間。二十三年の実績を持つ著名な所長が三月に逝去。中継役の書士は間もなく転出してしまった。結局、全く未熟な小生が見知らぬ此の地で独立開業することとなった。途中、早々と退散する策もあり得たし、完全独立が単純に果たせた訳でもない。しかし、招かれた以上、この縁を大事にした



事務所看板



事務所にて

訪問販売による庭改良工事の原状回復及び代金返還請求等、訴訟に移ることを覚悟して事態の裏を読み、先を見据えながら、第一段の取組に関わることが求められる。また、家事事件として相続放棄の申立、不在者財産管理人の選任申立等、本人や親族等に限定されている家事事件でも、書士の介入を求める依頼者が多い。訴訟関連案件は二つとして同じものが無いので緊張せざるを得ない。

という強い想いと、これに賛同するスタッフに恵まれ、一歩一歩前進することができた。九月には、簡易裁判所での訴訟代理人となる審査に合格。そして年内には家庭裁判所や自治体等から要請を受けて成年後見人となる為の資格取得も見えて来た。事務所の場所は商店街に隣接している。これでもうやく「街の法律家」として第三の人生を歩み出すことになった。

業務の範囲は書士個人の考え方でかなりの開きがある。小生は、①登記②訴訟③成年後見の三本柱で始めることにした。

登記では不動産登記が旧来からの業務であり、これだけしか行わない書士もかなりいるらしい。確かに、市民にとって不動産は通常の一生に一度の大きな買物であり、また、相続の発生時には最も紛争が生じ易い財産である。従って、人・物・意思について慎重な確認が必要となる。他人に成りすまして、売買の条件を満たしているか否かを慎重に見究めなければならない。銀行から「これで大丈夫です。」と言われても省略は許されない。

このような機会に恵まれたことに感謝しつつ、地道な努力を積み重ね、「街の法律家」として街の信頼と成果を得ることができれば本望である。

叙勲 おめでとうございます

瑞宝小綬章 木部 英人 氏 (元 防衛施設庁建設部通信課長)
瑞宝双光章 浅野 利信 氏 (元 中部方面通信群)
瑞宝単光章 小川 正富 氏 (元 通信保全監査隊)
瑞宝単光章 佐々木 年昭 氏 (元 第2通信大隊)

瑞宝小綬章 青野 繁 氏 (元 通信学校副校長)
瑞宝小綬章 齊藤 信 氏 (元 関西地区補給処副処長)
瑞宝小綬章 成松 徳三 氏 (元 通信補給処長)
瑞宝小綬章 吉岡 誠 氏 (元 通信補給処長)
瑞宝双光章 新田 易 氏 (元 中部方面通信群)
瑞宝双光章 根岸 英明 氏 (元 北海道補給処)

親父たちの国際貢献

イン カンボジア

山本 忠文



会を頂いた。

カンボジアは自衛隊が初めてPKOを実施した国である。また、世界遺産のアンコールワットやポルポトの大虐殺等がよく知られている。

カンボジアには過去の戦争の負の遺産として未だに多くの不発弾や地雷が残っており、これにより毎年沢山の人が犠牲になると共に国土の開発・発展が著しく妨げられている。

地雷や不発弾は全土にわたり残存しているが、不発弾についてはベトナム戦争時の米空軍のホーチミンルート(カンボジアを経由)に対する空爆とカンボジア内戦による砲弾が主で大半はベトナムとの国境に近い地域に偏在している。また、カンボジアには約五〇〇万個の対人地雷が在ると言われているがその多くは北西部のタイとの国境地域に存在し、これらは内戦時ポルポト軍、政府軍の両者が敷設したものであり中国製、ソ連製、ベトナム製等が混在している。

JMASは二〇〇二年から同地での処理活動を開始したが、当初は自己資金のみで活動せざるを得ず一州において不発弾処理から着手した。その後、活動成果が認められ

政府の無償資金が供与されるに伴い逐次に活動地域、活動内容を拡大し現在に至っている。

不発弾処理活動は現在カンダール、コンボンスプー、コンボンチャムの三州において現地実行機関であるカンボジア地雷処理センター(CMAC)の協力を得ながら実施している。

各州の編成は日本人専門家1名を長に二個の不発弾処理チーム(七名)、四名の不発弾等危険低減啓蒙教育要員と通訳、医師等で約十五名である。活動は不発弾情報の収集、回収作業、爆破処理の手順で実施し各州一ヶ月で一〇〇発程度の処理実績を挙げている。また、これと並行して不発弾発見時の情報提供や禁止事項等について啓蒙教育を実施しており犠牲者の減少に大きく寄与している。

一方、地雷処理活動は二〇〇六年から北西部のタイ国境のバタンバン州で実施中である。二名一組で幅一・五m×奥行き四〇cmの地域の草木を除去した後、探知棒により地雷を探知しマーキング、これを繰返し少しずつ前進し、最後に纏めて爆破処理を行う。実に根気の要る作業で且つ人海作戦である。また、酷暑の中、防護服を着けて行う過酷な作業でもあり作業する隊員には頭の下がる思いである。編成は二名の日本人専門家の下、CMACの三〇三小隊(九十九名)と通訳、医師等であり、この中には現地でCMACに採用された若い女性も沢山含まれている。

また、昨年から小松製作所の支援を受けて機械力による地雷処理を始め処理速度の向上に着手した。同時に簡易な道路整備、溜池の掘削や学校建設等も実施し地域住民から大いに感謝されている。

また、活動成果を犠牲者数でみてみると、一九九八年に二五〇名であったのが二〇〇八年には二六名と激減し、極めて意義深い貢献であると自負している。



第1小隊の隊員と

一 信友会とは
会員相互の親睦を図ることを目的に陸上自衛隊通信科幹部OB及び通信科に関連のあった幹部OBの会員で構成し、現在会員数は全国で一〇〇〇名程度であります。

二 創立経緯等
昭和三十九年それまで主として関東地区で活動していた通信科職種幹部の種々のOB会がまとまり「通信OB会」として約七十名の会員で発足、昭和四十三年に会則を設定、昭和四十八年には名称を「信友会」と改め逐次全国に会員数を増やし、現在に至っております。

三 活動内容
事務局便りに紹介していますが、総会・合同歓迎会(懇親会)を年に一回行っております。昭和五十二年から現役との共催で新退官者の歓迎を兼ねて懇親会を実施しており、会員相互はもとより現役と会員相互の懇親や情報交換の場として役立っております。

また各地区の会員相互の親睦を図ることを目的とした地区懇親会を、昭和六十一年から各方面通信群等のご支援を戴きながら行っています。

機関紙「信友」の発行は昭和五十四年から続いており、通信科の現状や活動状況、会員の状況・トピックス等通信科OBの情報紙として全国会員を結ぶ重要な手段となっております。また五年に一度は全国会員の近況等の便りを掲載しています。

また平成十七年から信友会ホームページを立ち上げ、信友会事務局からのお知らせ、会員の近況紹介、陸自通信電子の動き等を掲載し、会員相互の情報交換の場として活用していただいております。

会員名簿は三年に一回作成配布しており、会員相互の連絡等に役立っております。またその間の年に変更追加等の補遺版を作成配布しております。

趣味の活動として関東地区でゴルフコンペを年に二回(春・秋)開催し親睦を深めています。

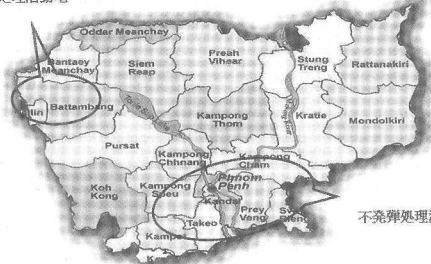
この様な現地に於ける活動を支えるために首都ブノンペンに現地代表部がある。私の外二名の日本人女性が経理、総務担当として勤務し、七名の現地人と共に仲良く頑張っている。現地代表部の仕事は東京の本部との調整、外務省に対する事業申請書の作成支援、事業の中間及び完了報告書の作成(含む経理)と大使館への提出の他、訪問者、取材等の対応やカンボジア関係機関との連絡調整等を初め広範多岐にわたっている。当初は通信科出身で不発弾等の専門的知識がなく若干の不安もあったが、自衛隊における管理者としての経験と下な英語と若干の予算関係の知識で十分に代表の任を全う出来た。健康と家族の理解に恵まれ極めて充実した勤務と数々の得難い体験をさせて頂き感謝の念で一杯である。

現場視察(左端)



JMAS(カンボジア)の活動地域

地雷処理活動地域



不発弾処理活動地域

信友会の紹介

信友会の創立経緯や活動等について通信科OBの皆さまや現役の皆さまに十分広報されていないというご意見もあり本紙面を借りて信友会の概要を紹介させていただきます。

*事務局からお願い
会員の御知合いの方で信友会未加入の方がおられましたら入会のお誘いをよろしくお願い致します。また現役の皆さまも退官の際は本会の趣旨等ご理解の上、ご入会されますようお願いしております。

その他会の活動等についてご意見等ありましたら事務局まで一報ください。

『中方通信会』の紹介

中方通信会会長 室 岡 敏 昭



信友会会員の皆様及び機関紙「信友」ご愛読の皆様
益々ご健勝・ご活躍のこと
とお慶び申し上げますと
もに、日頃から中部方面通
信群(中通群)及び中方
通信会をお引き立て賜り大変有り難うございます。

この度、中方通信会のために、本紙紙面を割いて頂
きましたので、わが通信会の紹介をさせて頂きたいと思
います。

これまで伊丹駐屯地の中通群にお見えになった方々か
ら「中方通信会」は、他のOB会とは何処か違う。」とい
うお言葉をよく頂きますので、今回は、その「中方通信
会の特徴」について、紹介したいと思います。

まず、中方通信会の目的は、「通信会の諸活動を通じて、
会員相互の親睦と交流を図るとともに、中通群が実施す
る訓練行事等を側面的に支援し、OB会員と現職隊員との
絆を深める。」ことであり、その会員は、「中通群に在
籍した退職者の他に、中通群を転出された現職隊員で入
会を希望された方及び中通群に所属する現職隊員で入会
を希望する方」としており、この「会員構成」に最大の
特徴があります。また、中方通信会の活動としては、
「積極的に各種行事・会合に参加し、会員相互間及び現
職隊員との親睦を深めるとともに現職隊員には人生設計
の着実な推進に寄与するように努力するほか、会員の消
息等についての情報を積極的に事務局に提供」すること
です。即ち、会の目的達成のために、「全会員一人ひと
りが積極的に活動しよう」と心掛けていくことも一つ
の特徴といえます。

次に、中方通信会の発足の経緯について述べますと、
約三十数年前の昭和五十二年に、『中方通信隊、第一〇
三固定通信大隊、中部方面通信隊及び中部方面通信群に
在籍した者の集まり』との声がOBの間に高まりまし
たので、それを受けて設立準備世話人会の方がOB会の
準備を始め、その当初は、「近通会」という名称でした
が、昭和五十三年三月の中通群創立十五周年記念行事時
に名を改め「中方通信会」として誕生致しました。

以来、中方通信会の事業として、「総会の実施、中通
群の実施する行事、訓練等の支援部隊研修の実施及び会
員等の相互扶助」を行っております。現在の会員は、名
譽会員たる歴代群長を含めて約四百三十名であり、昨年
は、中通群創立記念行事に併せた総会と叙勲受章者への

記念品贈呈及び中通群の各種厚生関係行事への参加と主
要演習・訓練に合わせた激励等を行ったほか、中通群に
ご協力を頂き、「鯖江・富山派遣隊」の部隊研修とそれ
に併せた近隣OBと両派遣隊員皆様との懇親並びに近
傍の史跡見学を行いました。その成果として、参加者の
声を紹介致しますと、「在職間、北陸の派遣隊まで足を
運べなかったもので、この機会に参加しました。(中略)
退職後疎遠になっていた地元会員の方も駆けつけ、近況
や昔話に花が咲き、充実した時間を過ごしました。」と
の感想のように、近隣からも、多くの会員が参加され親
睦を図ることができました。このように中方という広域
に展開する中通群の通信会にとりましては、本研修を重
要な活動の一つと位置付けております。また、自衛隊の
任務多様化に伴い中通群が御家族に行っている「家族支
援対策」に中方通信会も貢献すべく、今年の新たな活動
として加えましたが、これら全て、中通群と中方通信会
の更なる発展のために必要なものと考えております。

最後にりましたが、「人は石垣、人は城」との故事
のように、これからは「人」に優い「人」を大切に
した中方通信会として、「積極進取・活発」に活動をして
まいりたいと考えておりますので、今後とも、皆様のご
支援・ご協力のほどよろしくお願い申し上げますととも
に、歴史と伝統のある「信友会」の益々のご発展を祈念
申し上げます。



中方通信会総会



部隊研修(富山)



年末行事

信友会地区懇親会のお知らせ

平成二十二年は三月上旬、中部方面通信群創立記
念祝賀会に併せて、中部地区懇親会を行う予定です。
中部地区の会員各位には、別途ご案内致しますの
で奮ってご参加ください。

訃報 謹んでご冥福をお祈り申し上げます
(H20.12.02~H21.12.01の承知分)

氏名	逝去年月日	住所
榎本 俊雄	H17.12.10	東京都荒川区
長嶋 一豊	H19.01.29	埼玉県朝霞市
桐村 政弘	H19.08.01	埼玉県新座市
野瀬 清水	H19.10.26	大阪府東大阪市
新明 敏男	H20.01.16	北海道札幌市
小沼 幸雄	H20.02.01	東京都目黒区
坊 健榮	H20.02.01	東京都東村山市
阿部 武士	H20.06.14	熊本県熊本市
小穴 平八	H20.08.26	埼玉県鴻巣市
山崎 定雄	H20.09.24	鳥取県西伯郡
岩戸 貞次	H20.10.08	東京都小平市
平見 武彦	H20.11.07	岡山県玉野市
太宰 清	H20.11.08	福島県福島市

氏名	逝去年月日	住所
菊池 龍一	H20.12.23	北海道札幌市
鈴木 昌夫	H21.01.16	神奈川県藤沢市
槍田 明	H21.02.01	埼玉県さいたま市
松浦 昇	H21.03.30	埼玉県狭山市
高木 雄幸	H21.02.10	東京都北区
堤 清	H21.04.17	千葉県柏市
諏訪 賢司	H21.04.28	群馬県藤岡市
月野木 久	H21.05.24	山梨県南都留郡
生駒 卓也	H21.06.16	神奈川県横浜
桑波田 景富	H21.08.12	東京都板橋区
杉浦 裕孝	H21.09.19	千葉県浦安市
加茂 敏夫	H21.10.01	東京都港区

平成21年度信友会会計報告
(H21.1.1~H21.12.31)

収 入		支 出	
前年繰り越	6,092,799	慶弔等事務費	188,000
年会費	200,000	郵送等事務費	435,896
通信等事務費	216,000	印刷費	663,553
利子	2,541	原稿料	24,276
第45回総会残金繰入	4,170	地方交付金	100,000
		総会会場代	100,000
		振込等手数料	13,640
計	6,515,510	次年度繰越	4,990,145
		計	6,515,510

以上のとおり報告します。

平成21年12月31日

信友会会計幹事

村田 和美

監査の結果、異常ありません。

野崎 正光

平成21年12月31日

信友会 監事

吉田 義輝

森 康雄

創隊五〇周年特集

通信団五〇年の歩み

通信団

通信団は昭和三十五年一月十四日に編成完了し、間もなく創隊五〇周年を迎える。今般、当紙に投稿する機会をいただいたので、団の歴史の一端を紹介したいと思う。当初の編成は、本部及び本部付隊、中央基地通信隊、通信監察隊、第三〇一写真中隊(以上市ヶ谷)、第一通信群(久里浜)及び第一〇一固定通信教育大隊(岐阜)となっていた。もちろん通信団が一夜にして出来上がったわけではない。その前身は、昭和二十七年十一月中央通信所として発足し、陸上自衛隊創隊とともに固定通信群となり、固定通信群本部及び本部管理中隊は、四谷分屯地から、写真中隊は芝浦から、第一〇一固定通信大隊(中央基地通信隊)は、霞ヶ関からそれぞれ市ヶ谷に移駐してきた。

昭和三十六年一月十八日航空保安通信隊が編成され、団隷下となった。同隊は、昭和四十三年三月一日中央管制気象隊と名称変更し、長官直轄部隊となった。同日付で、通信学校長隷下の臨時特別通信隊が、通信標準隊となり団に隷属した。通信標準隊は、昭和五十六年八月、東千歳に移駐、第一電子隊となり、北部方面隊に編成された。

平成六年三月中央システム管理隊が編成され、団隷下に。同隊は、平成二〇年三月システム開発隊となり、研究本部隷下になる。また、平成十五年三月発足したシステム防護技術隊は、平成十七年三月システム防護隊となった。この間、隷下各隊は数度の改編を経て現在に至っている。

編成の変遷を俯瞰すると、その時代の要請がどのようなものだったかが、おおよそ想像できる。一時期とはいえ、航空管制や電子戦を担っていたということは、通信団という部隊の地位・役割は、陸幕から見ても、幅広いものである。好むと好まざるとに拘らず、通信団は、それだけのバッファを求められており、その特性は今後も変わらないものと思われる。諸先輩の業績に敬意を表するものである。

通信関係の変遷。昭和四十三年五月、自動即時電話市ヶ谷中継交換所が開所。昭和四十五年五月、東京・大阪自営マイクロ回線開通。昭和五十四年四月、防衛マイクロ回線開通記念式典。昭和五十五年二月豊送信所廃止・

四月朝霞送信所運営開始。平成元年衛星通信可搬局(久里浜、固定局(市ヶ谷) 運営開始。平成三年三月陸自データ通信運用開始。平成六年三月陸自指揮システム運用開始。平成九年四月、陸自指揮管理通信システム運用開始(全国)。平成十五年三月、DIIオープン系運用開始。平成十七年三月、セキュリティオペレーションセンター開所式。

主要な通信手段は、当初のHF無線通信から、自動即時網、データ通信へと変遷してきている。通信電子技術の進歩とともに自衛隊の通信も発展してきたことがよく解る。技術の進歩は備品・装備品に反映され、組織の改編を伴い、そのための訓練と意識の改革を求められる。このサイクルは、技術の進歩が止まらない限り変化しない。

通信団が創隊五〇周年を迎えるということは、団が(陸上)自衛隊通信の中枢を担当するという任務を著実に遂行してきたということと、五〇年間の時代の変化に適切に対応してきた証左であるとも言える。組織に通信は必要不可欠であり、(陸上)自衛隊が存続する限り、役割の変化、名称の変更はあり得るとして、通信団も存続するだろう。しかし、存続が確実であっても、平坦ではないだろう。それは、過去を振り返れば簡単に解ることである。将来に対する責任を全うするためには、日々の任務を着実に遂行する以外にない。たまた過去を振り返ることはいいことだと思う今日この頃である。



更なる飛躍の時 通信団

創隊五〇周年を 迎えるにあたって

北部方面通信群

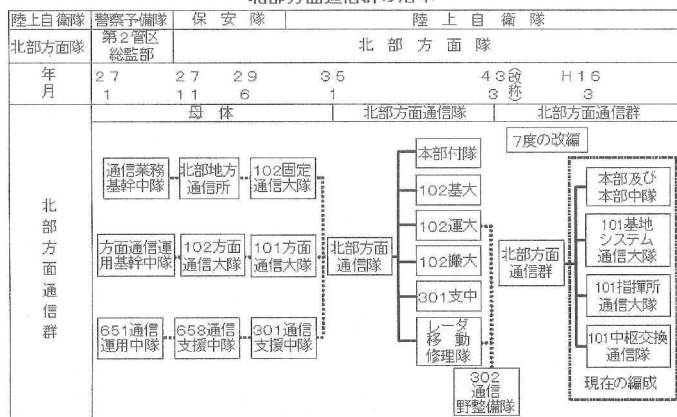
信友会会長をはじめ会員の皆様、機関誌「信友」に北部方面通信群の紹介の機会を頂き大変うれしく、また、感謝しております。今回、北部方面通信群が創隊五〇周年を迎えるにあたり、紙面をお借りして「北部方面通信群五〇年の歩み(沿革)」、「五〇周年記念行事に向けての取り組み等」について紹介させて頂きたいと思っております。

北部方面通信群は、昭和二十七年一月にその母体が誕生し、昭和二十七年十一月には、「北部方面通信所(後に固定通信大隊)」、「方面通信大隊」、「通信支援中隊」として発足、以来七年余、北部方面隊通信部隊の二本柱としてともに協力しつつ成長、発展してきました。昭和三十一年一月十四日方面管区制の施行に伴い三つの部隊が統合され「北部方面通信隊」を編成、ここに陸上自衛隊最大の通信科部隊が誕生し、この日をもって創隊の日と定められました。昭和四十三年三月一日、「北部方面通信群」へ改称、その後も新通信器材の導入、換装による改編を繰り返して現在に至っております。この間、各種教育訓練、災害派遣、カンボジアをはじめとする四度の国際貢献活動、札幌雪まつり協力及び昨年実施された北海道洞爺湖サミット支援等部内外において広く活躍しております。

「北部方面通信群創立五〇周年」に向けての取り組みについては、今年五月に、副群長(藤田一佐)をプロジェクト長とし各幕僚、部隊担当者により「創立五〇周年記念行事プロジェクトチーム」を発足させ、平成二十二年七月三、四日(予定)の記念行事に向け約一年をかけて準備を進めているところです。通信群の誕生五〇年の大きな節目の年に「考え得る最大限の記念行事」を実施し、来賓の皆様、隊員家族を含めて在職全隊員をもってお祝いする機、観閲式、観閲行進、祝賀会食、家族コミュニケーション等を計画しておりますが、今後更に内容を具体化し皆様に喜んでいただけるよう準備をすすめてまいりますのでご期待いただきたいと思います。

以上、北部方面通信群の沿革、五〇周年に向けての取り組みについて紹介させていただきましたが、こうして五〇年の歴史と伝統を継承できたのも歴代群長をはじめ諸先輩並びに日頃から北部方面通信群にご理解を頂きご支援くださる皆様あってのことだと深く感謝しております。このような「節目」に関わることができたことを喜びとし、「北部群創立五〇周年」そして未来へ・・・

北部方面通信群の沿革

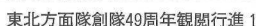


50周年記念ロゴマーク

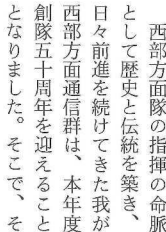
をキャッチフレーズに中内通信群長を核心に二二〇〇名の隊員が団結し、皆様に喜んでいただけるようおもてなしたいと考えておりますので、どうぞよろしく願っています。

東北方面通信群長 寫末 真

昨今の国内外情勢に目を転じますと、平成二十一年四月に北朝鮮から衛星と飛翔物が呼称している明らかに弾道ミサイルと思われる飛翔物体が我が東北方面隊の上空を通過したのは、記憶に新しいことと思います。通信群は、東北方面に展開した航空自衛隊のPAC3部隊のためのシステム通信組織、並びに飛翔体の上空通過後の地上偵察のための映像伝送組織を構成、維持、運営し、任務を完遂しました。また、その直後に起きました角田市における大規模な山林火災においても通信群の映像伝送組織を地方自治体、災害派遣担当部隊である第二施設団の前方指揮所に展開し、特に微小熱源探知装置により、状況判断に資する重要な情報を角田市長、施設団長を始めとする必要な方に配信し、ユーザーのニーズにしっかりと応えることができました。平成二十年六月に起きた岩手・宮城内陸地震においては、通信群はもとより東北方面隊内の通信部隊が総力を結集して方面隊の災害派遣任務のためのシステム通信組織及び映像伝送組織を構成、維持、運営し、任務を完遂したことは我々通信群の誇りとするところであります。また最新の情報通信分野に目を向けましても、平成二十一年にロシア軍がグルジアに侵攻した際は、まずグルジア政府或いは軍の指揮通信システムをサイバー攻撃により完全に制圧した後、戦車部隊が国土を蹂躪したと伝え聞いております。このように昨今の国内外情勢は、まさにいつ何が起きてもおかしくな



西部方面通信群長 一等陸佐 藤井祥一



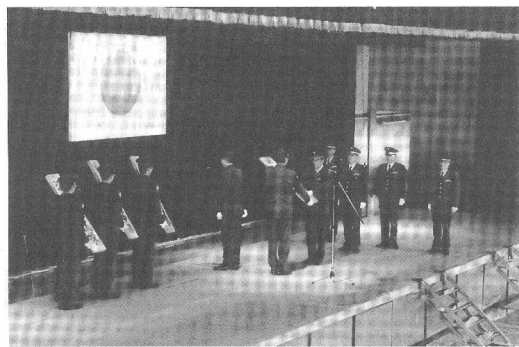
の歴史の一端と現状について紹介いたします。

我が通信群は、昭和三十五年一月十四日、西部方面通信群の前身である西部方面通信隊として産声をあげました。初代隊長 萩平昌之 一等陸佐は創隊にあたり統率方針として「一 通信使命の積極的遂行」「二 融和団結」「三 技能の錬磨」を掲げ、その第一歩を踏み出しました。

創隊時の西部方面通信隊は、通信隊本部、通信隊本部付隊、第一〇四基地通信大隊、第一〇三通信運用大隊、第三〇一搬送通信中隊及び第三二〇通信支援中隊から編成されており、このうち、通信隊本部、通信隊本部付隊、第一〇四基地通信大隊本部及び本部付隊、第三二一基地通信中隊が健康に、野外通信部隊が相浦駐屯地に、基地通信大隊隷下の第三二〇四基地通信中隊が福岡に、そして十三個の基地通信隊が管内の各駐屯地に配置されていた。

翌年三月二十四日には、相浦に所在していた野外通信部隊が、健軍駐屯地に移駐を完了し、現在の体制に近い部隊配置となりました。

その後昭和三十九年三月二十四日には、第三〇四通信野整備隊が新編され、整備業務の効率化が図られるとともに、昭和四十二年三月一日には基地通信部隊に十六個駐屯地との交換業務を集約するとともに、これまでの二個基地通信中隊、十三個基地通信隊から三個基地通信中隊、十五個基地通信隊体制へと新（改）編されました。そして、その際部隊名を現在の「西部方面通信群」に変更し名実ともにその隊容を一新しました。その後も通信群は、ヘリ映像伝送部隊の新編、後方支援体制の改革、システム部隊の改編等大小数度の新編、改編等を実施し、平成二十一年三月二十六日には、創隊以来半世紀にわたり、方面隊のために活躍してきた野外通信部隊であり、第一〇三通信運用大隊、第三〇一搬送通信中隊及び第三〇二通信支援中隊を廃止するとともに、新たに、第一〇三指揮所通信大隊及び第三〇二中樞交換通信中隊を編成



編成完結式における部隊標記授与式

し、新生「西部方面通信群」が誕生しました。創隊以来五十年、基地システム通信組織を維持・運営しつつ、野外通信組織を拡充して、方面隊の骨幹通信を担うという重要な任務を完遂すべく、常に即動態勢を維持しつつ教育訓練により訓練成果を積み上げ任務を遂行してきました。その輝かしい功績は、総監検閲受閲時の評価、各種通信支援における任務の完遂状況、多数の災害派遣の活動状況及び国際貢献活動等において多大の成果を収めており、また、バレーボール及び空手等の各種スポーツ競技会においても比類のない成果を多数残し続け、現在まで脈々と精進西部方面通信群の伝統が継承されています。西部方面通信群は、創隊五十周年の節目となる今年度、「方面隊総合通信演習」という未だかつてない方面隊の全通信力を展開して実施する大規模な通信演習に臨もうとしています。この演習においては、国防の第一線部隊にふさわしい、ICT化された方面隊電子交換システム(改)で構築された野外システム通信網と基地システム通信網を融合し、西部方面隊隷下の各通信部隊と連携し、方面隊の作戦のためのシステム通信組織を構築します。そのため段階的な練成を重ね、通信群全隊員が一丸となり個人及び部隊の能力を最大限に発揮できるように、群長統率方針の「任務必成」を各人が強く認識し、躍進しているところであります。

最後に、来る平成二十二年二月中旬には、創隊五〇周年記念行事を健康駐屯地において実施いたします。信友会の皆様及び関係者の皆様のお越しを心よりお待ちしております。

一 はじめに
平成二十一年度は、防衛大綱・中期防衛力整備計画及び防衛省改革の検討並びに防衛省改革に伴う陸幕改編の検討等、将来の防衛力及び省・陸幕の体制に関する検討が実施されているところです。また、政権交代に伴い平成二十一年度第一次補正予算の一部執行停止、二十一年度概算要求の再提出等、各種見直しが行われました。

通信・システムに関わる主要事象としては、五月に派遣されたソマリア沖・アデン湾における海賊対処のための部隊及び十月に派遣されたインドネシア・西スマトラ州パダン沖地震に伴うインドネシア国際緊急医療援助隊との間に民生通信を主体としたシステム・通信組織を構成し見事に通信任務を完遂しました。

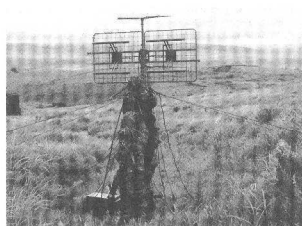
また、四月の北朝鮮ミサイル事案においては、指揮システム・基地通信回線等の構成・維持等を行い、情報の速達に貢献しました。

陸上自衛隊通信電子の現況

陸幕通信電子課



部内外で好成績を残す西通群バレーボール部



搬送アンテナ建柱中の隊員

一方、厳しい予算環境は常態化しており、防衛省としては、総合取得改革推進のための取組として、一般輸入調達問題への対応、装備品のライフサイクルコスト管理の強化、コスト抑制のための達成目標の設定、インセンティブ契約の拡充、中央調達・地方調達の見直し等の総合取得改革を推進しているところです。

このような環境の中、将来の通信体制を見据えつつ、陸上自衛隊通信電子・システム分野の発展・充実のため、通信電子課一同、日々の業務に取り組んでおります。

二 主要通信電子器材等の整備

平成二十一年度は、方面隊電子交換システム(西部方面隊)、師団通信システム(改)(第四師団・中央即応集団)、師団等指揮システム(第八師団)、衛星単一通信システム(第九師団、中央即応集団)、基幹連隊指揮統制システム(第二師団・第六師団)等が逐次部隊に納入されます。

また、新規装備品としての「無人偵察機、対空戦闘指揮統制システム及びUAV(近距離用)」を取得する予定です。

本年度のシステム関連事業は、中部方面隊の方面隊指揮システム及び西部方面隊の補給管理システムを換装します。

また、「移動型情報通信基盤」、「高速・大容量のデータ通信」、「ソフトウェア無線技術による無線機の統合」を特徴とした「新野外出信システム」の開発が引き続き行われていくとともに、平成二十四年度の装備化に向けて陸幕関係各部・研本・技本・補統・通信学校・通信団の協力を得て陸幕通信電子課長田原一佐を長とする「新野外出信システムプロジェクトチーム」を立ち上げ運用・編成特設・教育訓練・補給整備等について検討しているところです。

更に、平成二十一年度第一次補正予算において百年に一度の予算を確保できた「駐屯地情報基盤の整備」事業を現在推進しているところです。本事業により一四三ヶ所・分屯地の音声・データ回線がメタルケーブルから光ケーブルに換装され、現在まで整備が進まなかった事業が一挙に整備されます。

本事業においては、陸幕情報通信・研究課及び通信電子課の通信科職種が一丸となって、予算の確保を行いました。また、各部隊の協力を得て、陸幕通信電子器材班長を長とするプロジェクトチームを立ち上げ調整等を行い現在円滑に進捗しているところです。

三 体制変換

(一) 内局等の改編
防衛省改革においては、平成二十年度から検討が本格

化し、様々な検討がなされましたが、政権交代に伴い、更に一年間の継続検討を行っているところです。

また、一連の情報流出事案を受け、防衛省内における情報保全態勢の強化を図るため、陸・海・空自に設置されている情報保全隊を統合し、共同の部隊として、八月に「自衛隊情報保全隊」が新編されました。

(二) 陸自部隊の新編
平成二十一年度末には、第一混成団が廃止され、第十五旅団が新編される予定です。

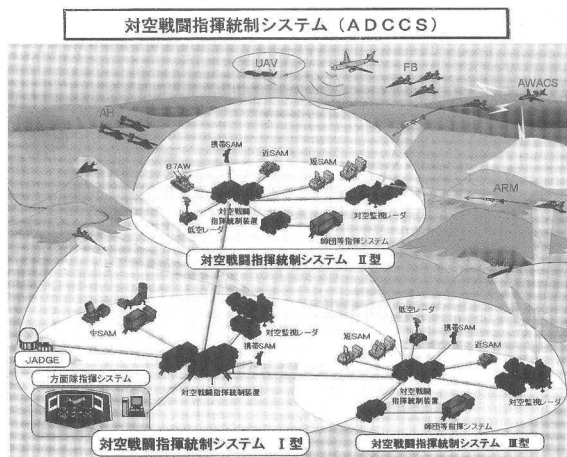
また、多様な事態への即応性を向上させるため第十四旅団に第十四飛行隊が新編される予定です。

(三) 陸自通信部隊の改編等
平成二十一年度末、師団等指揮システムの導入に伴い、第八通信大隊が改編され、師団等指揮システムの運用及び保守・管理体制が整備されます。

また、第十五旅団の新編に伴い二等陸佐を指揮官とする第十五通信隊が新編されます。

四 おわりに

現在、「新大綱・中期防に係る検討」が実施されていますが、限られた予算の中、将来のシステム通信に大きく関わる「新野外出信システム」、「衛星幹線通信システム」等の事業を推進し、あらゆる任務に対応するため通信電子・システム分野の充実発展に日々努力して参る所存ですので、信友会の皆様のなご一層のご指導・鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



事務局だより

一新会員名簿の発刊

本年度は三年ぶりに新会員名簿(正)を作成・配布致しました。

新名簿は都道府県別の区分で整理しておりますが、前名簿に対する会員からのご意見等を踏まえて一部記載順序を変更させていただいております。形式、内容等に関してご意見等ありましたら事務局までお寄せ下さい。なお昨年度は二十名の方が新会員として入会されました。

二 信友会総会・合同歓送迎会の開催

昨年度の第四十五回信友会総会及び通信科・信友会合同歓送迎会は、平成二十一年一月二十一日(土)に会員・現役合わせて約三百名の参加を得て盛況裡に終了しました。

本年度は、第四十六回総会・合同歓送迎会を、平成二十二年二月二十日(土)に、昨年と同じく「第一ホテル東京(新橋)」において開催する運びとなりました。会員皆様多数のご参加を心からお待ち申し上げます。

三 地区懇親会の開催

昨年度は、六月に東北方面通信群創立記念行事に合わせて東北地区懇親会を実施し、会長以下役員を含め三十三名の方が出席して懇親を深めました。

本年度は、中部方面通信群のご協力を戴き、三月頃に予定されている同通信群創立記念行事に合わせて中部地区懇親会を実施するよう計画しております。会員各位のご参加をお待ち致しております。

四 信友会ホームページ

信友会のホームページを開設して約四年が経過いたしました。まだまだ十分とは言えませんが、信友会本部と会員各位及び会員相互の連絡・意思の疎通に役立っているように思います。

益々ご利用いただき、ホームページを更に

ホームページ: <http://shinyukai.fc2web.com/>
e-Mail: shinyukai@livedoor.com

信友会新入会員名簿

(H20.12.02~H21.12.01)

氏名	現住所	最終所属	退職年月日
河合孝弘	埼玉県新座市	情報本部	H20.03.22
末田八郎	千葉県我孫子市	技本	H20.03.31
加藤健	東京都練馬区	通信団本	H20.09.30
国澤輝生	埼玉県所沢市	2師団司令部	H20.12.01
井上豊喜	埼玉県草加市	補統本部	H20.12.05
小林建郎	熊本県	西方通群	H20.12.15
勝野和徳	群馬県前橋市	12後支隊	H21.01.27
鮫島茂広	埼玉県富士見市	通信団本	H21.02.15
佐藤政志	東京都板橋区	東通群本	H21.02.23
中村憲一	福岡県福岡市	九州補給処	H21.03.24
石原次男	埼玉県さいたま市	中基シ通隊	H21.04.25
大平卓功	埼玉県	幹部学校	H21.04.29
松岡裕子	東京都練馬区	会計監査隊	H21.05.02
今井恵治	埼玉県	通信団本	H21.08.01
田辺利明	東京都	幹部学校	H21.08.01
水野博之	東京都	東北方後支隊	H21.08.01
伊藤豊	埼玉県ふじみ野市	通信学校	H21.08.08
西村謙一	福岡県福岡市	九州補給処	H21.09.13
齋藤貴志男	福島県福島市	東北指訓支隊	H21.11.10
古内幸雄	千葉県柏市	補統本部	H21.11.10

良いものに育てていただきますようご協力お願いいたします。

五 信友会役員の紹介

信友会会長は、平成二十一年度総会で再任された福井孝三氏が二年目の職を執っております。

役員交代は一名で機関紙幹事の佐藤正之氏が退任され、鮫島茂広氏が就任いたしました。

現在の役員は、次のとおりです。

〔会長〕 福井孝三

〔副会長〕 行徳浩志

〔事務局長〕 水口二平

〔総務〕 長 佐藤誠喜

松浦学・角和三郎・小島保仁・門野睦廣

〔機関紙〕 長 上田萬満

中村好男・三浦慎平・今村行雄・鮫島茂広

〔名簿〕 長 木下典夫

渡邊顕徳・草木迫彰・三浦義章

〔会計〕 長 村田和美

野崎正光

〔監事〕 長 森康雄(機関紙から転任) 吉田義輝



合同歓送迎会



地区懇親会(東北)

編集後記

三十三号を無事、発刊することができホット安堵しております。これもひとえに会員皆様のご協力の賜物です。まことにありがとうございます。

現役主要役職者挨拶については、今回新しく着任された陸幕通信電子課長、補統通信電子部長の御二方に寄稿をいただき感謝に耐えません。

今回は、会員の最近の活発な御活躍の状況を皆様にぜひ紹介したいと思いました。司法書士試験合格最高齢の記録を更新された星野毅氏、JMASカンボジアで各種の困難を持ち前の粘り強い性格で克服し、目覚ましい成果を残された山本忠文氏、中万通信会の会長として活発に御活躍中の室岡敏昭氏に投稿をお願いしました。御三方に御快諾していただき、誠にありがとうございます。

平成二十二年に五十周年の節目を迎える部隊がありますので今回特集を組みました。通信団、北部方面通信群、東北方面通信群及び西部方面通信群が該当します。通信団長及び各方面通信群長に部隊の近況等について寄稿をお願いしました。それぞれの部隊の特徴が出た記事が寄せられました。大変お忙しい中、貴重な時間を割いていただきご協力いただいた各部隊長に対し紙面を借りて謝意を表したいと思います。

「三十三号」は「三十一号」の様式を踏襲し、紙面を大きくしました。「機関紙は字が小さくて読みにくい」というご意見を反映し、前回と同様A3タブロイド版にしました。そのため、紙面の枚数が若干多くなりました。また、毎回お願いしていることですが、機関紙では会員皆様のご近況・ご意見等に関する投稿を歓迎しております。「信友」の一層の充実に協力ください。毎年夏ごろまでに、事務局宛ご投稿をお願いします。

最後に、事務局便りにありますように、永らく機関紙幹事として活躍された森氏が退任され、鮫島氏が新戦力となりました。